
それぞれの夢

姉子

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

それぞれの夢

【Nコード】

N0158F

【作者名】

姉子

【あらすじ】

いろんな人にいろんな夢。夢に翻弄されるのも、追いかけるのも、自由で悲しく美しい。ああ、今日も夢を見続けたい。全4話、毎週日曜日更新予定。（そしてあくまで予定）

お告げ

私には夢がある。

高校2年の夏休みから今まで付き合っている翔との結婚。小さなころからの夢のひとつ、大好きな人と幸せになることは24歳の今現在まで叶っていない。

忘れもしない去年の七夕、翔はそれまで必ず電話かメールをしていた習慣に突然終わりを告げるように音信不通となった。まさか病気？などと思い、次の日に翔の家に行ったがすでにいなかった。その日は帰ってくるまで待つつもりで、翔のベッドに寝転びながら携帯を握り締めていた。

「あかり？」

体をゆすぶられ覚醒すると、目の前には翔がいた。もうすっかり夜で、人工的な光が目突き刺さった。どこに行っていたの？なんで連絡くれないの？と、いろんな言葉が頭の中で回っていたが、私はそのまま泣きながら翔に抱きついた。

「ごめん、ちょっと実家に帰ってた」

泣きじゃくる私の背中をぽんぽんと叩き、それだけ言うと翔は後は

何も言わなかった。なんだかとてもめんどくさそうだった。でも触れる手は優しいままで、私は聞くこともできずに黙ったまま翔に身を委ねた。

それからだ、なんとなく翔が私を遠ざけ始めたのは。

連絡は3日に一度あればいいほうで、頻繁だったお泊りも今はない。一回だけ最近どうしたの？と聞いてはみたが、翔は「別に」とだけ言ってコーヒーばかり飲んでいた。まるで何も聞くなと言わんばかりに、不機嫌そうにずっとコーヒーを飲んでいたのだ。居たたまれなくなった私は何も言わずに席を立ったが、翔は追いかけるどころか言葉をかけることもなく私を見送った。いや、見送ったのではない。見ただけだ。

私たち、終わりなのかな。

そしてそれが決定的となり、連絡を取ることなく1ヶ月が過ぎた。もちろんその期間顔もあわせていなかったし、声も聞いていない。寂しさなんてものはとっくになくなり、逆に怒りが芽生えた。自分に非があったのかと落ち込んだことさえも馬鹿らしく感じる程だ。

「ばーか、翔のばーか」

ソファの上に仰向けになり、腕を伸ばして携帯の待ちうけを見る。初めて一緒に撮ったプリクラだ。しかもいわゆるチュープリと言われるもので、我ながら恥ずかしい産物である。しかし何故か変える

気にはならなかった。今更変えるのも少し寂しいような気もしたのだ。それに画面の人物は高校生の自分たちだが、まったく別の人間に思えたので申し訳ないというか、失礼というか。

「うわっ！」

微弱な振動とともに映し出された翔という文字に、思わず壁に投げつけてしまいそうになった。そして恐る恐る見るとそれはメールではなく電話のようで、数秒考え込んだ後出ることにした。

「あかり？」

もしもしなんて言葉はすっ飛ばし、いきなり呼ばれたことに思わず反応できなかった。うれしかったのだ。しかしそれはすぐに怒りに変わった。無言のままなのを気にすることもなく、翔は唐突に言い放った。

「親父が死んだ」

それは予期せぬもので、「死んだ？」と鸚鵡返ししかできなかった。

「去年の七夕に倒れたんだ。それで実家に帰ると家を継いでくれなんて言われて。もちろん俺はきっぱりと断った。やりたいことあっ

たし。でも俺の家代々続いてるみかん農家でさ。親父が誇りを持ってるのも知ってたから、随分悩んだ。でも俺、家を継ぐことにした」

そこまで言い終わると、翔は大きく息を吸い込んでまるで誓いのようにささやいた。

「俺、あかりと結婚したい」

さすがにそこで鸚鵡返しは無理だった。何しろ今度こそ考えもしなかったからだ。「別れてくれ」と言われるとばかり思っていたのに、いきなりのプロポーズだ。

「身勝手なのはわかってる。俺はあかり以外との結婚は考えられない。でもこのままあかりを幸せにする自信がなかった。いきなり農家の嫁にさせられるなんて苦労するのは目に見えてるし嫌だろうな。だからいっそ嫌われたらいいなって」

そこまで言うと、とうとう黙ってしまった。ザーっと耳元で電話が沈黙を伝えた。

「・・・農家」

「ああ」

「みかん・・・よね？」

「みかんだ」

ぽつりぽつり喋ることに丁寧に返答する翔。いつもなら考えられない。それだけ必死だということだろうか。

「どうして家継ぐことにしたの？」

それは、と言うと先ほどとは打って変わって小さな声で「夢で親父までの先祖に家を継ぎって怒られた」と拗ねた子どものように言った。そしてそれがあまりにも面白くて、電話口でお構いなしに爆笑した。

「そ、それで家継ぐことにしたんだっ？」

「笑うなよ！すっげえ怖かったんだからな！なんか鍬とか鎌とか持つて追いかけられたんだぞ！」

もはや上戸を盛り上げるための話にしかならなかった。当人には恐ろしい悪夢だったかもしれないが、聞く方にしたらただの面白夢日記だ。歴代の先祖が、鍬や鎌を持って自分の子孫を追いかけているが、家を継げと攻め立てる。どう考えても笑い話にしかならない。

でも翔はそれで家を継ぐことを決意したのだ。もちろん夢で殺されそうになったからだけじゃないのはわかっている。悩んだのだろう、それこそ誰かに構ってる余裕などない程に。

「そ、それでさ、もうひとつ聞きたいんだけど」

「なんだよ」

少し落ち着いたのを見計らって話すと、あからさまに不機嫌な声が聞こえてきた。それさえもなんだか懐かしく感じた。

「その夢に私は出てきた？」

「ああ、俺と一緒に逃げた。でもお前笑いながら逃げてたよ」

あの状況で笑えるなんてお前はすごい女だな、とあきれ口調で翔が言った。夢に出てきた女を、さも本人かのように語る口調にもう一度笑った。しかしそのおかげで決められた。

「私、翔と結婚する」

また耳元にはあの不快な音が響いた。でもさっきよりかは幾分マシな沈黙だ。かすかに向こうから息を呑む音が聞こえた。

「い、いいのか？ そんな簡単に決めて」

「いけないの？ 翔から言ってきたんでしょ？」

「それはそうだけど・・・」

うれしいらしいが複雑で、その後何度も「いいのか？ 本当によいか？」と問い掛けてきた。それもそうだろう、本人には決定的な言

葉はなかったようなものだ。しかし、決めたのだ。決められたと言っても過言ではない。

「それよりいいの？建築士になりたかったんじゃないの？」

「いいんだ、最近妙に興味が沸きだしてさ」

「先祖の呪いの効果だね」

「やめろよ、冗談に聞こえない」

再び声を震わせる翔に「泊まりに行っていない？」と聞くと、「いつも勝手に来てるだろ」とぶっきらぼうに言われた。いつもの口調で、本当に元通り、それ以上の関係になれたことを感じた。

「一緒に逃げてるんだからこれは結婚しなくてどうするよーって感じ」

「あ？何か言ったか？」

「なんでもないよ」

そしていつものお泊りセットを持ち、翔の家に行くべく扉を開けた。

でっかい

でっかい夢がある。

「馬鹿だなー、そう簡単に宇宙飛行士になれるかっての」

しかもお前だし、と和斗は鼻で笑った。

「何だよ！夢は大きく！！」

「大きすぎて夢で終わるぞ」

「ちょっとは応援しようとは思えないのか？！」

「思えないね」

昂の父は昔宇宙飛行士で、名前も星を愛する父からつけられたものだった。寝ても覚めても星を熱く語る父親だったため、昂も必然的に宇宙飛行士に強い憧れを持つようになっていった。

「お前が広人さんみたいにかっこよくて頭よくて英語ペラペラだったら応援したかもしれないけど」

「宇宙飛行士にかっこよさなんてはいつてない！」

「突っ込むべきところがそこしかないのはわかるが・・・現実みろって」

ひらりと目の前に現れた英語の解答用紙。それは見るも無残な結果で毎回のことといえば話しは終わってしまうが。

「宇宙飛行士目指すんならせめて平均点とれよ」

父広人が事故で亡くなるまで、昴はずっと父を教師に様々なことを教わった。しかしそれも昴の記憶力の頼りなさで覚えていることは無いといっても過言ではない。実際に、授業の8割は記憶にないのだ。それがその無残な結果というわけだ。

「こ、これからだ！俺の才能が開花するのは！」

「高校2年で開花しねえんだったらあきらめという言葉を知れ」

これ見よがしに大きなため息をつく和斗に顔をしかめながら、昴は掌を作って天井に向かって突き出した。と、同時に立ち上がったため通りすがりの勝にアッパーを食らわす羽目となり、昴は仕返しに平手打ちを食らうこととなった。しかし勝は柔道部に所属する喧嘩馴れしている男だ。昴は勝にしては十分手加減された左頬をさすりながら性懲りもなく掌を天井に突き上げた。

「勢いがなくなったな」

「うるさい！今度ぶたれたら俺は泣く！」

「そんなこと宣言すんなよ」

「俺様はぁー！」

やれやれと言いたげな和斗を尻目に昴は声を張り上げた。

「親父と同じ宇宙飛行士になる夢をおー必ず叶えることをおーここに誓いまあーっす!!」

何回目だよそれ、と他のクラスメートに突っ込まれながら昴は合掌した。

「ここは墓場じゃねえぞ」

和斗がそう言ったと思うと、次の瞬間に昴の頭上に大きな手が乗っかってきた。それは和斗のものであった。

「ま、努力してみるんだね」

「何様だ！お前は!!」

「ん？学年1位の和斗様だけど？」

「くっそー！この根性悪のくそ眼鏡ー!!」

「あっそ、だったら英語はもう見てやんないから」

「え?!嘘?!嘘だってば!」

「嘘つきは泥棒の始まりだ。俺は友人兼幼馴染が強盗なんてお断りだね」

昴がしまったと思って後祭り、後悔先に立たずのような感じで。

しばらく和斗に平謝りする昂が目撃されたのは言うまでもない。

でっかい（後書き）

・・・予定は未定！！

（ごめんなさいごめんなさいごめんなさい

事実は真実（前書き）

内容に酷い行為の詳細は描いていませんので大方大丈夫ですが、少しでもSMに嫌悪感を抱く方はお控えください。

事実は真実

恐ろしい夢を見た。

女たちが全裸で俺を取り囲む夢だ。それも毎日。

「何だそれー自慢か？夢でも俺を馬鹿にしてんのか？」

「別に、それにそんないいもんでもなかったんだ」

「ますます何だそれー？！全裸の女に囲まれるなんて現実で起こるこたあないんだぞ？！楽しめよ！もっと夢の中という無法地帯を存分に楽しめよ！！」

「全員がS Mグッズを手にしてもそれ言えるか？」

「おう！新境地だと思って思いっきり旅立て！」

「相変わらずのMっぷりだな、だからフラれるんだよ」

「お前今鼻で笑ったな？！俺の中でお前は最低ランクの吐瀉物と成り果てたぞ！！」

「もういいよ、ゲロでもなんでも」

こいつは見えてないからこんなことがいえるんだ。そりや最初見たときはさすがに樂園だなんて思ったけど、あれは地獄以外のものじゃない。全員だ、全員が俺をいたぶる武器を手にしてうすら笑っているのだ。鞭や蠟燭は当たり前、手枷足枷ボールギャグは基本装備、口にするのもおぞましい小さいものから大きい道具の数々。思い出しただけでも寒気がとまらない。

「大体さー、なんでそんな何回も見てんの？欲求不満？」

「失礼な、俺はすべての欲求を女性に受け止めてもらっている」

「うわっ、お前今女を敵に回したぞ?!」

「男は使ってなんぼだろ」

そうだ。男として、襲われるより襲うほうがいいのだ。年をとれば嫌でも使い物にはならないだろうし、今という欲望は今しか発散できないのだ。それを襲われる側で俺は満たされることはない。それなのに、毎日見る夢はオカズにさえならない凄まじい光景だ。

「一回試してみたらどうだ？」

「馬鹿を言うのは死んでからにしてくれ。俺にそんな趣味はない」

「でもさ、そんな毎日おかしいだろ？試してみろよ、喜んで調教してくれるお姉さまぐらいいるだろ？」

「いない。俺は断じて攻め側だ」

「あっそー、んじゃ紹介してやろうか？」

「・・・やっぱりいたんだな。でも遠慮するよ、お前のMっぷり見てたらそのお姉さまの加減が怖い」

「お前さっきから失言が多いな！さすがの俺も怒るぞ！平手打ちするぞ！」

「その平手打ちってのが妙に生々しいんだよ」

夢の俺も、女たちの意に反するとすぐさま平手打ちをくらっていた。まあ平手打ちならまだマシな方だと言えそうなんだが。

それからそいつは俺に無理やり誰かの電話番号を握らせ、とにかく電話しろ！と言ってさっさと帰っていった。俺はもちろん電話する気になどなるはずもなく、待ち合わせの女に会うべく足を速めた。

やっぱり男としては攻める方がいい。そういう趣向に走る人もいる
とは思うが、俺はそういう性癖でもないし興味がない。そう、まっ
たく興味がないのだ。見るのも触るのも従順でかわいい女がいい。
決して俺を縛り上げ、痛めつけて高笑いする女はごめんだ。

「実？」

「ああ、ごめん。ちょっと考え事」

今まさに目の前にいる美果もかなりのかわいさだ。「今はあたしの
ことだけ考えてよ」なんて涙目になりながらすがり付いてくる様
ななんてたまらない。こう、支配欲が沸いてくる。

「んじゃ美果から誘ってよ？できるだろ？」

恥ずかしながらも俺の言う通りにする美果。やっぱり、俺は攻める
方がいい。

「ふふふ・・・実、いえ豚とでも呼びましょうか？」

（冗談じゃない！）

「何その反抗的な目は？もっと酷くしてほしいの？」

（馬鹿やろう！お前に突っ込まれるぐらいなら死を選ぶ！）

「あら、往生際が悪い家畜ね。だったら希望通りにしてあげましよう」

(やめろ!!)

「俺の尻は排泄行為しか認めねえ!!」

「み、実?! 何真昼間からハードな妄想してんだよ?!」

そこは食堂だった。俺は昨日の行為で頑張りすぎて寝不足になり、昼ごはんを食べながら寝ていたらしい。食堂にいた生徒がほぼ全員その奇声に顔をしかめていた。

「しまった・・・今の発言、お前ってことにしといてくれ」

「馬鹿なこと言うなよ?! 俺どんな羞恥プレイだよ?!」

「わがまま言うな、そんなんじやお姉さまに嫌われるぞ」

「大きなお世話だ!」

まさか居眠りにまで例の女が出てくるなんて。俺はすっかり冷えたから揚げを口に放り込んだ。

「お前やバいんじゃねえの?」

「だな・・・どうしたんだ、俺」

「だから電話しろって言ったんだよ、たまには親友の提案も聞き入れろ」

「誰だそれ?」

「お前! 俺号泣するぞ?!」

「勝手にしろ、俺は他人の振りをして平和に暮らす」

「俺に安息はないとでも言うのか?!」

その日、俺は意を固めて電話することにした。もう我慢の限界だった。このままじゃ俺の性生活に支障をきたす。

「実君・・・だったかしら？」

電話の主は、上品な感じでいかにも女王という感じだ。俺は思わず身震いをしていた。

「ああ、あんた三井さんだろ？」

「ええ、やっと電話する気になったのね。楽しみにしてたのよ」

女はくすくすと笑い、俺は普段相手にする女とは違った高飛車な感じがとても頭にきた。しかし今回は俺が立場的には弱かった。何せSMを体験させてもらうからだ。

「今日あいてるかしら？ 時間は10時、場所はサンライズホテル」
「わかった」

「物分りがいい子は好きよ」

「俺はまだあんたの犬じゃない」

「そう、ごめんなさいね。でも」

あなたは犬じゃないわ、家畜よ。

そう言って三井という女は電話を切った。俺は夢の女の声と少しだけ重ねてしまったことに激しく自己嫌悪し携帯の時計を見た。そして9時20分を確認し、蒸し暑い外に俺は無言のまま出て行った。

「待ってたわ」

女はスーツ姿で、俺を上から下へと嘗め回すように見た。年はだいたい24、5歳だろうか。

「やっと帰ってきたのね」

「は？何言ってるんですか？」

三井は俺の問いに答えるどころか無視をし、さっさとホテル内へと姿を消した。俺は振り回されるのに抵抗できないことに、何故かだんだん違和感を覚えなくなっていた。

「まずは元に戻しましょう」

「さっきから何言ってるんだ？」

部屋に入ってから三井は意味不明なことを口にした。そして俺の

前で強く両手を合わせた。

「どう？思い出した？」

笑っていた。三井はずっと笑っていた。

「あ・・・」

「思い出したようね」

そして俺は、三井の言う通りすべてを思い出した。

「俺・・・」

「どうだった？夢での出来事は？」

「えっと・・・」

「答えられないの？」

「いえ、言葉にできないと言うか・・・」

「じゃあ同じことをしてあげましょうか？その時に感想でも聞こうかしら」

そして三井は女とは思えない速さで俺の左頬を平手打ちした。

そう、俺は催眠術をかけられていたのだ。

「今日は楽しくなりそうね」

そしてすぐに大勢の足音が聞こえ、俺は指示されるまま服に手をかけた。

赤の後に

夢がある、とても叶いそうにない夢が。

真奈美が入院して、早7ヶ月となった。

初めは単なる風邪かと思っていたが、頭痛、吐き気は日を追うごとに強くなっていき、特に朝方は起き上がることさえ困難な程酷くなっていった。しかし真奈美は病院には行かず、薬局で買った薬でどうにか誤魔化かしていた。

真奈美が病院に行かなかった理由のひとつは経済的なことだった。両親は真奈美が19歳の時に事故で亡くなり、唯一頼れる親戚はもうすでにいないか、借金を抱え逃げ回っているか、親交がまったくないのどれかだった。友人に相談するも、皆無難に「大丈夫だよ」と声をかけてくれるだけで、卒業と同時に連絡は取れなくなった。頼れるものは何もない、と自分以外は信用できなくなっていた。

しかしそんな真奈美にもたった一人、大事な肉親がいた。妹の10歳の香奈穂である。真奈美にとって香奈穂だけが救いとなっていた。しかし当然のことながら、小学生なのでお金がかかった。両親の保険金だけではさすがに無理で、真奈美はがむしやりに働いた。それでも香奈穂がいてくれるだけで、真奈美はどうか毎日を苦勞しながらも幸せに暮らすことができたのだ。

「グリ・・・オーマ？」

聞いたこともない病名に、真奈美は首をかしげた。そもそも病名にすら聞こえなかったが、医者の説明から考えると、それが妥当であった。

「神経膠細胞の腫瘍のことです。簡単に言えば脳腫瘍のことですね。岡崎さんの場合、グレード3のため一刻も早く手術が必要です」

その後何やら小難しいことばかり言っていた医者の説明は一切真奈美の耳には届いていなかった。時々「難しい」「生存率」「抗がん剤」という単語だけが耳元で回り続けめまいがした。脳神経外科を紹介された時点で嫌な予感がしていたが、ここまで重い病気だなんて考えもつかなかった。

「ご家族は？」

「妹が・・・一人」

「そうですか・・・」

医者は哀れみにも似た表情で真奈美を一瞥し、「入院手続きは明日にしましょう」とだけ言いって真奈美を解放した。それから真奈美が考えるのは香奈穂の今後の生活についてであった。香奈穂はまだ17歳で真奈美の稼ぎなくして暮らしていくのは無理だった。普段も香奈穂がアルバイトをし始め少しだけ余裕ができていたが、真奈美としては少ない学校生活を満喫してほしいばかりであって、ここで「病気だから学校をやめて働いてほしい」などと言えるわけがなかった。

しかし真奈美に頼れるものは何もない。その事実が真奈美に大きく

圧しかかり、真奈美は死ぬと言う選択を本気で考えていた。

「お姉ちゃん?!」

真奈美が気づいたときにはすでに自宅のキッチンで包丁を手首を切り裂いていた。幸い深い傷ではなくて香奈穂の帰りがたまたま早く発見、処置がすばやかだったので大事には至らなかった。ただ、真奈美の頬は香奈穂の平手打ちで赤く腫れることとなった。

「どうしてあんな真似したの?! どうして勝手に決めちゃうのよ?!」

泣きじゃくる香奈穂の背中を、真奈美は「ごめん」と何十回と言いながらさすり続けた。

「お姉ちゃん・・・病気になっちゃったんだ」

ようやく絞り出した声は小さく、一瞬香奈穂も聞き取れなかった。しかしもう一度「病気になった」と告げると香奈穂は真奈美の頭を胸で抱きしめ、最初以上に大声で泣き始めた。「ごめん」と、今度は香奈穂が何度も叫び続けた。

「香奈穂・・・学校はちゃんと行かせてあげるから心配しなくてい

いのよ」

真奈美がそう言うのと、香奈穂は瞬時に泣き止み真奈美の前で正座した。

「お姉ちゃん、今は病気のことだけ考えよう。あたし、学校よりお姉ちゃんの方がずっとずっと大事なんだよ」

「だめよ、あなたはまだ高校生でしょ。友達もたくさんいる」

「だから死んでお金作るつもりだったの？」

香奈穂のストレートな言葉に真奈美は目を伏せた。行為について無意識だったとはいえ、考えていたことは事実であった。でもそれはすべて香奈穂のためであった。

「あたしのためだと思ってる？ だったら大きな間違いよ。お姉ちゃんがもし自殺なんかしたらあたしは一生自分を許せない。一生幸せになんかなれない」

「でもこの病気は手術後も莫大な費用がかかるし完治も難しいのよ。それじゃいつそのこと・・・」

言葉にはできなかった。死ぬとわかっているでも言葉にして自分の耳で聞くのは過酷であった。

「お姉ちゃん、あたしずっと守られてきた」

今度はあたしが守りたい、と香奈穂は再度真奈美を抱きしめた。

「たった2人きりの家族でしょ？お姉ちゃん」

真奈美は恐る恐る香奈穂の背に腕を回した。そして今まで守ってきた小さな妹の大きな背中が、ただ愛しくて涙が溢れてきた。そこで改めて真奈美は香奈穂に支えられ守られていたことを感じ、いつの間にか泣きだした香奈穂と疲れ果てるまで泣くのだった。両親がいなくなつて真奈美が香奈穂の前で泣いたのはこれが初めてであった。そして最後だった。

真奈美には夢があつた。とても叶いそうにない夢が。

「ああ・・・空を飛んでみたい」

注意して聞いていないと聞き取れない程の大きさだった。香奈穂は窓の外を見つめる真奈美の手をとり明るく言った。

「そうだね、治ったらスカイダイビングでもしてみる？」

真奈美 of 症状は治るどころか悪化していくばかりだった。医者にしてみれば「もう長くないかもしれない」といったところだったが、香奈穂は決してあきらめていなかった。言葉数は激減したが、しっかりと話す声にいつも安心させられていた。

「香奈穂・・・空がきれいだね」
「そうだね」

もうすっかり夕暮れで、真っ赤な太陽がゆっくりゆっくりと沈んでいた。強烈な赤色が病室を、真奈美を染めている。香奈穂は目がくらみ、真奈美の手を離そうとした。

「離さないで・・・お願い」
「ああ、ごめんね。ちよつとまぶしくて」

もう一度強く握ると、真奈美はにっこりと微笑んだ。そのやせ細った手のひらがやがて暗闇に飲まれると、香奈穂は電気をつけるために真奈美の手を離した。そのときは数秒前のように「離さないで」とは言わなかった。電気をつけると真奈美は目をつむり眠っていた。

「寝ちゃった・・・」

香奈穂はもう二度と目覚めないだろう真奈美の頬に手を寄せ、それからしばらく見つめていた。

「苦しく・・・なかった？空・・・飛べるといいね」

香奈穂は永遠に眠り続ける真奈美を抱き寄せ大声で泣いた。感謝と、これからの孤独に耐えるために。

真奈美には夢があった。それは、いつか叶いそうな夢が。

赤の後に（後書き）

完結です。ここまで読んでくださった方、ありがとうございました。
他の作品もどうぞのぞいてみてくださいくださいね。
それではー

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0158f/>

それぞれの夢

2010年10月9日07時05分発行